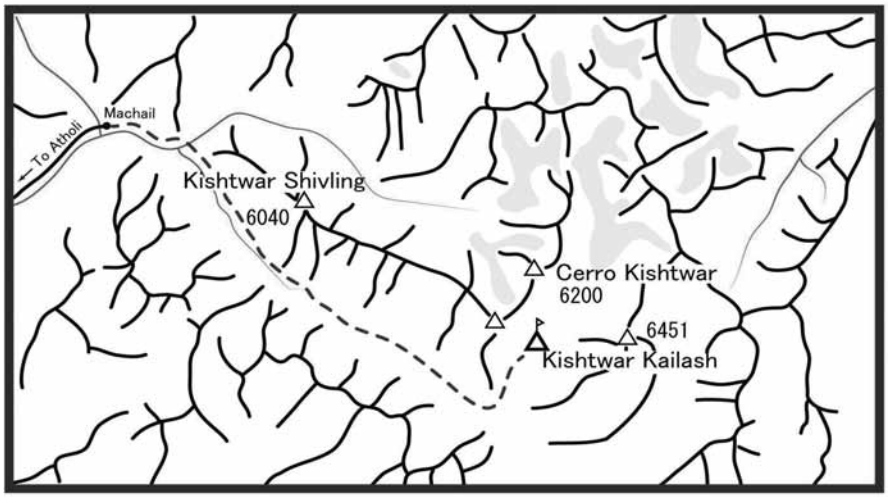
アルパインスタイルでの新ルート登攀のタクティクス

佐　藤　裕　介（石川労山めっこ山岳会）
（聞き手：編集委員　恩田真砂美）

2018年９月に鳴海玄希氏、佐藤裕介氏、山本大貴氏によってインド　セロキシュトワール（6200m）北東壁「Aal izz well」ルートが初登された。ヒマラヤの大岩壁における新ルート開拓の実際について、その技術的な側面から佐藤裕介氏に聞いた。





概念図：日本ヒマラヤ協会提供

１）行程について

日本出発から帰国まで40日間。

日本出国後６日目からトレッキングを開始し、実質４日でBC（3900m）へ入った。その後順応登山に６日間（5550m）。準備・レスト・天気待ち６日間後、１日でABC（4650m）入り。北東壁トライは４日（ABC4650m～頂上6200m～ABC4650m）。下山はABC～BC２日。詳細は以下の通り。

	月日	曜日	行動概要	
1	８月25日	土	11:15 成田空港発	エアインディア AI307便　17:00 Delhi着
2	８月26日	日	Delhi	10:30 Briefing meeting
3	８月27日	月	～Manali / 2050m	4:00～22:00
4	８月28日	火	Manali	
5	８月29日	水	～Killar / 2500m	4:30－7:30峠越え－10:45Udaipur－16:00
6	８月30日	木	～Machail / 2800m	4:30－9:30Gulabgarh-16:00
7	８月31日	金	Machail滞在	
8	９月１日	土	～3450m	8:00～14:00
9	９月２日	日	～3620m	9:00～15:30着
10	９月３日	月	～Base Camp 3900m	6:50～7:50
11	９月４日	火	登山期間1	東壁偵察：１時間
12	９月５日	水	登山期間2	東壁偵察。デポも兼ねる

	月日	曜日	行動概要	
13	9月6日	木	登山期間3	休養
14	9月7日	金	登山期間4	BC－4500m
15	9月8日	土	登山期間5	－5150m
16	9月9日	日	登山期間6	－5400m
17	9月10日	月	登山期間7	5400mにて天気不良のため
18	9月11日	火	登山期間8	－5550m往復－4500m
19	9月12日	水	登山期間9	－ABC4650m設営－BC
20	9月13日	木	登山期間10	休養 ギアの準備
21	9月14日	金	登山期間11	休養 食料の準備
22	9月15日	土	登山期間12	休養
23	9月16日	日	登山期間13	休養
24	9月17日	月	登山期間14	休養
25	9月18日	火	登山期間15	休養
26	9月19日	水	登山期間16	－ABC
27	9月20日	木	登山期間17	day1
28	9月21日	金	登山期間18	day2（登頂）
29	9月22日	土	登山期間19	day3
30	9月23日	日	登山期間20	day4－ABC
31	9月24日	月	登山期間21	雪の状態待ち
32	9月25日	火	登山期間22	－BC
33	9月26日	水	登山期間23	休養
34	9月27日	木	登山期間24	バックキャラバン1
35	9月28日	金	～	バックキャラバン2
36	9月29日	土	～Gulabgarh	バックキャラバン3
37	9月30日	日	～Manali	
38	10月1日	月	～Delhi	
39	10月2日	火	21:15フライト	Debriefing / エアインディア AI306便
40	10月3日	水	08:45　成田空港着	

２）セロキシュトワールを選んだ理由について

個人的にパキスタン遠征が続いており、インドでの遠征がしたかった。近年、立て続けに素晴らしい登攀が行われていたセロキシュトワールには以前から興味があり、マルコ・プレゼリが撮影した北東壁の写真を見たことがきっかけとなった。未踏のカッコ良い傾斜の強いミックス壁でセラック等の危険も少ないことから今回の目標と定めた。

３）時期について

インドヒマラヤのシーズンとしては早めであるが、ガルワール方面よりもかなり西に位置するためモンスーンの影響を受けにくいエリアとの情報もあり10月の一般的なシーズンよりも早めの入山とした。実際は、今回より２週間は遅らせたほうが良さそうだ。

４）メンバーについて

佐藤、山本で行った厳冬期黒部横断時インド遠征が決定。一昨年、山本とヒマラヤ遠征で組んでいた鳴海も誘って３人パーティーとした。全員、高所でのアルパインクライミングの経験がありモチベーションも高い。

５）登攀装備とその根拠について

＜クライミングロープ＞

シングル 9.1mm １本、ハーフ 8.1mm １本、スタティックロープ 8mm １本

1500mのミックス壁でセカンド、サードはユマールの予定でロープの消耗を考えロープは３本を持参した。２日目の頂上アタック時はロープ２本（シングル、スタティック)。実際は前半をほぼ同時登攀中心にユマールせず済ませられたのでロープの消耗は少なく、２本で良かった。

＜ギア＞

C3 #0,#１,#２、C4UL 0.3～3、トライカム５個、ナッツ５個、アイススクリュー５本、ピトン６本。1500m壁を登攀し、同ルート懸垂下降する予定だったのでそれに見合う装備を選定した。

クライミング				
品名	サイズ	個数	重量	備考
Joker unicore	9.1mm*60m/52g	1	3120	登攀
Iceline	8.1mm*60m/39g	1		3rdのバックアップ
セミスタティック	8mm*60m	1		3rdのユマール用
シングルロープ	60m	1		予備
ダブルロープ	60m	1		予備・順化に使用
荷揚げ 兼 捨て縄	6.5mm/25m	1		
ULAカーブナッツ		1set		Metolius
予備ナッツ		1set		CT
アストロナッツ	#6～10	1set		Metolius
ULキャメロット	#0.5～#3	1set		BD
ULキャメロット	#0.4	1set		BD
C4	#0.3	1set		BD
C3	#0，#1，#2	1set		BD
トライカム	#1(赤)，#1.5(茶)，#2(青)，#3(紺)，#4(緑)，#5(orange)	1set		Camp
ナイフブレード	#1	2	20	モチヅキ
ナイフブレード	#2	2	22	モチヅキ
アングル	#1	2		モチヅキ
レーザースピードライト	21cm	2	110	予備含む
	17cm	3	100	予備含む
	13cm	3	91	予備含む
アバラコフフック		3		各自
スリング １本は岩角用に10mm	180cm	1		
	120cm	2		ベアール
	60cm	7		ペツル
アンジュS		3		アンカー用
クイックドロー	17cm	5	56	CT
フリーカラビナ		30	24	CT
フリーカラビナ	アンジュL	10		ペツル
マイクロトラクション	+アンジュL	2		ペツル
タイブロック		1		ペツル
アッセンダー		2set		Petzl
フットコード		2		ペツル
コネクトアジャスト	環付カラビナ含む	2		ペツル
ギアラック(60cmスリング)		1		斜めがけ
ザック	45L～50L	2		TNF，Deuter
スノーバー		1		CT順応
赤旗用のテープ		1		順応や下降路に

アタック個人装備			
	品名		
クライミングギア	ハーネス	1	
	環付きカラビナ	4	
	ヘルメット	1	
	ビレーディバイス	1	
	パーソナルアンカー	1	
	ナイフ	1	
	アイゼン	1	
	アックス	2	
	スクリューラック	2	
	紛失防止コード	1	
ウェアー	アウターウェアー		上下
	下着		上下
	ミドルウェアー		上
	インナーダウン		上
	インナーダウン		下
	インナータイツ		下
	ビレージャケット		500～600g
	目出し帽		
	手袋		毛の手袋
			アウター手袋
			ミトン
	象足		BC
	スパッツ	1	
	登山靴	1	冬期用
	靴下	2	ネオプレーン
	靴下		厚手
	サングラス		2
その他	テルモス	1	900ml
	シュラフ	1	750g
	ヘッドライト		
	リチウム電池	2set	ヘッデン用
	リッジレスト	1	120cm

6）登攀時の食料・燃料とその根拠について

行動食は、高所でも取りやすいパワージェルを中心に準備した。いつも通りピーナッツ入り柿の種も採用した。燃料はガスカートリッジ大２個。厳冬期黒部横断のジェットボイル使用時の実績から試算した（大１缶で３晩計算)。最大日程５日より少し余裕を持たせた。

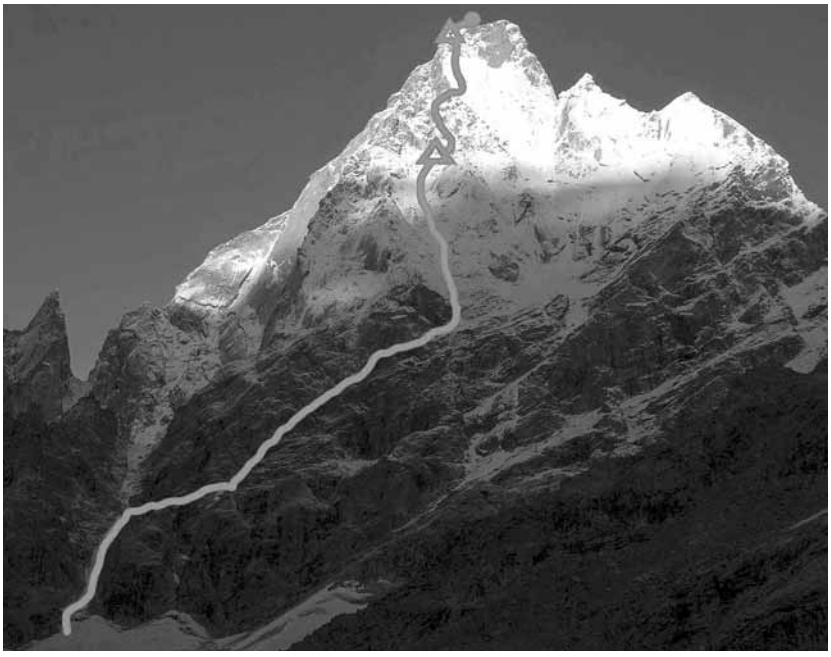
アタック時食料

食料：g　　6542

品名	サイズ	個数	重量	小計
マウンテンハウス	200g	6	200	1200
マウンテンハウス小	120g	2	120	240
アルファ米				3930
アマノフーズ		21	30	630
パワージェル		42	40	1680
パワーバーグミ		27	60	1620
バー		96	30	2880
カキピー		21	40	840
タブレット	11ヶ/日	110	2	220
ふりかけ	11ヶ/日	9	2	18
スープ		18	5	90
行動食		6	6	1500
				14848

行動食１食カロリー	サイズ	kcal	g
Power Gel		120	41
power bar　グミ		210	60
ソイジョイ		140	30
ソイジョイ		140	30
ソイジョイ		140	25
		750	186

7）ルートの見極めについて



セロキシュワール峰全景（佐藤裕介氏提供）
＊線は登攀ルート△はビバーク地を示す

＜事前準備＞

マルコ・プレゼリから入手した写真と、グーグルマップ（グーグルアース）を利用。壁の標高差は1200m～1500m程度と想定。写真は僅かしかなく、他の資料も乏しかった為、基本的に現地で偵察してから実際のルートは選定せざるをえなかった。

出発前までに写真等から受けていた壁の印象は、取り付きからミックス壁が続き特に上部は傾斜があり難しそう。下部は同時登攀が想定され後半はスタカットが続くと想定された。そのため、ロープは３本（２セット）を使用して登攀。特に難しくない場合は、ショー

トフィックスをしながらパーティー全体のスピードを高める。

＜ABCからの偵察時＞

基準としては、セラック崩壊や雪崩の脅威が少ないラインを選択した。技術的に厳しいラインは受け入れられるが、危険すぎるラインは避ける方針を採った。

様々な角度から偵察を行い実際の傾斜や、降雪後のスノーシャワーの走路を見てルートを選定した。北東壁中央（全体写真だと少々右よりのピークから落ちる大きなルンゼ状）の雪壁状に見えるラインは、スノーシャワー等が集まりすぎて危険なため却下した。下部の傾斜は出発前に思っていたよりも無く、事前の写真では岩の影になって分からなかった傾斜の無い雪のルンゼを発見して前半のルートとした。しかし最下部は全体に被っていて登攀は難しすぎることも実際に見て初めて判明した。それは、左のルンゼから登ったあとトラバースすることで解決した。中間部は、雪の集積面積がそれ程多くない左の浅いルンゼ状（ルンゼ左のリッジ上もルートの第２案として想定した)。中間部から本格的に傾斜が高まりミックスと氷をつないで最上部の氷雪につなげるルートを選定した。後半の強傾斜が技術的に難しそうだが、通常の天候であれば安全そうなルートに見えた。しかし、実際はリッジ上に登るには手間がかかり、選択肢とはなりえなかった。

＜登攀時＞

中間部までの氷雪ルンゼまでは、ラインは一目瞭然。弱点となる浅いルンゼを登った。中間部は、バーチカルアイスを含むアイスクライミングとミックスで上部北側の雪壁へトラバース。上部のスラブは、不安定な氷雪が乗った状態で悪かった。プロテクションが得られそうなラインを慎重に選びながらルートを選定した。

現場（ABC）で選定されたルートとほぼ同様だった。

８）高所順応について

＜計画＞

隣のチョモチョイル峰（6000m強）を6000m位まで登り、高所順応とする予定だった。500m／日で、５～７日間ほどをかける計画。

＜現場＞

チョモチョイルを登るよりも対岸の6000m弱の山を登った方が効率的に見えたため、そちらに向かった。

以下、BC入りから、高所順応山行終了までの行程

BC（3900m）まで４日間のトレッキング
１日目BC（3900）→4100→BC（3900）
２日目BC（3900）→4500→BC（3900）
３日目レスト
４日目BC（3900）→4450（曇りのち雨）
　順応登山開始
５日目4450→5150（雨・雪）
　ずたずたのクレバス帯があり悪い
６日目5150→5400（雪時々曇り）
　隊員１名の調子が悪く出発を遅らせる。脛ラッセル
７日目5400にて停滞（雪時々曇り）
　風雪の１日。停滞。
８日目5400→5550→4450（朝方晴れ後曇り、午後からみぞれ）6000mまで向かうには雪の状態悪く、セロキシュトワールが良く見えるコルまで上がってから下山開始。氷河上で幕営。

９日目4450→4650（ABC設置）→BC（3900）（快晴）
セロキシュトワール取り付きまで上がりABC設置後、BCに下山。

上記スケジュールで登攀時には順応良好だった。

＜その他＞

十分な期間を確保することが最も確実に順応を成功させることに繋がると思うが、長期間の休暇が取れないのが実情だろう。個人的には出国前に、富士山で２週間高所順応をする期間をとったが、今までよりも明らかに現地入りからの順応が順調に進んだ。

９）登攀技術について

①技術面で最も困難だったこと

中間部上のアイス（WI5）、ミックス（M6）部分。また、上部のスラブは不安定なパックスノーに覆われていて10m以上のランナウトに耐える部分も困難だった。

②判断面で最も難しかったこと

アタック２日目。翌日からの悪天が予想されていた。標高差は500m、困難な強傾斜のアイスとミックス壁が待ち構え、１日での登攀は厳しそうだったが登頂のチャンスは当日しかないと考えた。テント、シュラフ、マットなどをC1にデポしスピード重視の完全なファースト&ライトに切り替え登山を続行した。闇の中でも頂上を目指しクライミングを継続するが、１歩上がるごとに安全圏から遠のいていく実感があり、敗退するかクライミングを続行するか本来は判断に迷う場面だった。夕方以降トップである佐藤が（ショートフィックスしながら）ドンドン登っていってしまい議論する暇なく頂上へ到着したような感じになったが、実は個人的に判断にはそれほど迷わなかった。このメンバーなら、ずっと動き続けて登頂し下山できるという２人に対する信頼があったためだ。また、３人ともトライ前、さらには遠征前からよく話し合って、トライやリスクに対して同様の意識を持てていたことが迷い無い行動に繋がった。

③日本での山行において役立ったこと

今回のような壁で求められる登攀技術は、日本の山や壁を登り込めば身につけられる。傾斜の強いアイス、花崗岩の摂理のある壁でプロテクションを自分で設置しながらのミックスクライミング（例：錫杖）、プロテクションが取りにくいスラブ壁（例：明神）。それらのフィールドで自分なりのラインを見出し、登攀を積み重ねてきたことはヒマラヤでのトライの技術的基礎となっている。

④ヒマラヤのような大きな壁で求められること

大きな壁で特に求められるのはスピードと長時間動き続ける耐久力。穂高周辺でのパチンコなどの継続登攀から得られるものは大きい。それでもスケールの大きな壁でのスノーシャワーがどれほど凄まじいのか実感を持つには、海外の大きな壁に行くことも重要。佐藤はアラスカでそれらを体験した。今回は遠征前が無雪期だったこともあり６月を中心に瑞牆でマルチピッチクライミングの継続を行った。１日９ルート67ピッチや、２日間で85Pなどの登攀は１日20時間以上の激しい行動となり、トレーニングとしても良かった。

また、佐藤は厳冬期黒部横断を何度も経験しているが、その山行で得られる判断力や精神力は、外部からのレスキューがそれほど期待できない隔絶された地域での登攀時にも生きてくると感じる。

10）下降について

＜事前想定ルート＞

同ルート下降。中間部のルンゼはスノーシャワーなど条件悪い場合は左のリッジを想定。

＜登攀時＞

基本、当初の想定どおり同ルート。左のリッジはリッジ上にでるまでがかなりの登攀になりそうで選択肢から外した。

＜支点について＞

岩角10%、アバラコフ１回、ほか、ナッツ、ピトン、カムを使用した。

＜その他＞

予想以上の降雪で、危険なスノーシャワーと雪崩を受けながら下降することになった。

11）満足している点

多量の降雪に埋もれたABCに到着した時には疲れきっていたのだが、雪崩の危険の可能性を考え、夜にテントを出て、脱出する行動を起こせたこと。

12）失敗した点

ABCに到着した時に、雪崩の危険について気になっていたのに数時間そこに留まってしまったこと。

13）強化したい点

体力。もっと、重荷を背負っても素早く行動し続けられる体力を付けたい。